

害

{ みんなが知らない }
イノシシの生態

に迫る!!

最近、クマやイノシシやシカ、サルなどが街に下りてきて農作物を荒らしたり、人間に危害を加えるといったニュースをよく見聞きする。開発によって生息域が狭まったり、逆に山あい集落の衰退により、動物と人間が暮らす場所の緩衝地帯が少なくなってしまうこともあるようだ。そう考えると、ゴルフ場は動物の生息域に近い場所にあるケースが多いだけに、被害も相当なものだろう。ゴルフ場の獣害の実態に迫る。

取材／文加藤ジャンプ デザイン・高田康裕

夜行性のイノシシ被害により 朝になるとコースが穴だらけに

駆除しようにも ハンターが少ない

獣害が深刻だ。野生動物が街に出没したり農地を荒らすなど、被害が全国で多発している。野生鳥獣による農作物の被害は年間170億円を超える。国も対策に乗り出しており、2013年には約20億円だった補助金の支出額は翌年には約38億円、さらに15年には約39億円とほぼ倍増している。それほど獣害が深刻だといえる。

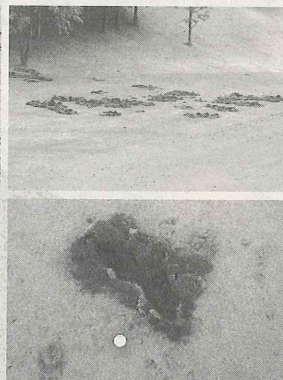
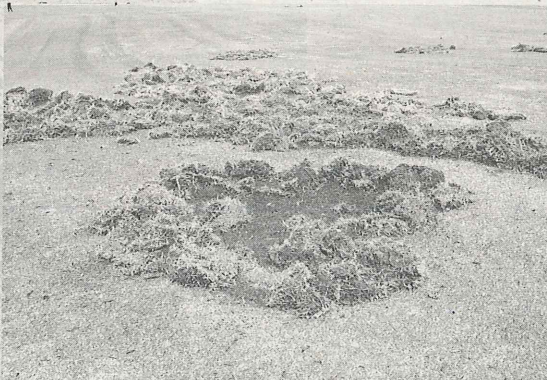
ゴルフ場も例外ではない。「ここ数年増えているんですが、夜間にイノシシがコースに入り込んでフェアウエーをこっそりと掘り返して

しまうんです。コースを閉めるわけにはいきませんから、イノシシによる穴掘りが発覚したら朝からスタッフ総出で修復作業をします。最悪の場合は芝生の張り替えですね。なかなか大変ですよ」

栃木県で鹿沼カントリー倶楽部など4つのゴルフ場を経営する鹿沼グループの福島範治社長は笑いながら述べ懐するが、「被害は年々増えている感覚がある」という。

そもそも、獣害が増えてしまった背景には、開発によって餌場が減ってしまった野生動物たちが農地を荒らすようになったことや、ハンターの数が減っているという状況がある。1970年度には約53万人のハンター

まるでトラクターのようにコースを掘り返してしまうイノシシ。中でもグリーンが被害に遭っては最悪だ（写真と本文は無関係です）



ゴルフ場の獣

昨年、京都大学の学生寮に出現したイノシシ。街中にも出没するのだから、ゴルフ場ではなおさら



写真・共同通信

ーがいたが、10年度には約18万人にまで落ち込んでいるのだ。しかも、そうした狩猟者のうちの6割以上が60歳を超え、超高齢化が進んでいる。それでも、10年度には約48万頭ものイノシシが捕獲されている。だが、被害自体は増え続けており、繁殖力の高さもあり、いくら捕っても数が減らない状況にあるようだ。そうした状況の中でハンターの高齢化が進めば、捕獲数も減ることになるのだ

う。そうなれば、さらに被害が拡大する可能性は否めない。

ミミズを狙って コースを掘り返す

ところでイノシシはゴルフ場の何を狙ってやってくるのだろうか。畑の作物や林の中に転がるドンケリのよな餌が、ゴルフ場にあるのだろうか。

「イノシシがゴルフ場で狙うのはミミズです」

これまで全国で数多くのゴルフ場を見てきた、ゴルフ場コンサルタント会社TPCの飯島敏郎氏は、雑食性であるイノシシの生態に触れながら、そう教えてくれた。

「そもそもの問題はゴルフ場周辺の里山の手入れが行き届かないことなんです」

里山の手入れがなされず荒れると、餌となる木の实などが育たなくなる。やがて餌を求めて野生動物がゴルフ場に流れてくるのは想像に難くないが、ことゴルフ場に関してはもう一つ独特な理由もあった。それは長引くゴルフ業界の不況だ。

「多くのゴルフ場が経費を削減する中、ゴルフ場の排水システムが劣化しています。実はゴルフ場の排水には二つの仕組みがあります。一つは表

面排水といって、地形に従って水を流れに任せるもの。もう一つは暗渠排水で、これは地下に埋設した排水管に水を集めて流すという仕組みです」

これには歴史的な背景もある。古いゴルフ場は、建設当時の重機の性能も低く、ほとんどが表面排水を採用していた。ゴルフ場の設計そのものも、元からあった地形を利用したものが多く、排水も同様にそうした自然の流れを利用したのである。こうしたゴルフ場の場合、長い年月を経てもあまり排水上の問題は発生しない。

問題は、バブル期に激増したゴルフ場である。この時代に造られたゴルフ場の多くは、山を切り開いた造成によるものが多い。そうした人工的に造られた地形は、地盤沈下などが起きやすい傾向がある。そのため、地形は開場時から時を経るにつれて、想像以上に変化しているのである。そのために、例えば表面排水を採用していても、排水マスの位置が実際の水の流れとはズレてしまうことが珍しくない。また暗渠排水も同様の理由で、暗渠の位置に水が集まりにくくなり、うまく排水できなくなるケースがあるというのだ。

「そうなれば、水はけを根本的に解

決するために工事をしなくてははいけません。ですが、残念ながら、そんな経費は出せないコースがほとんどなのです」

そのうえ、こうしたバブル期のゴルフ場は、

「当時の排水管は細くて排水の機能が低く、排水の能力が元来低いものが多いんです。なおかつ排水管の劣化も進み、水はけは悪くなる一方なんですよ」(飯島氏)

その結果、コース全体が水を多く含んだ状態になる。さらに、土壌の改良の費用も節約することが多いために、芝を刈ったカスがたまるなどして、スポンジのように水を含んだ状態になってしまふ。つまり、表面上は美しい芝生ながら、めくってしまえば、

「ゴルフ場全体に腐葉土が敷き詰められたような、グジュグジュの土だらけというケースも少なくないんです。そうした環境はミミズが繁殖しやすくて、それを狙ってイノシシがやって来るのです」

畑ならともかく、ゴルフ場が腐葉土に覆われてもいいことはないだろう。そこで捕獲に乗り出すことになるのだが、これも一朝一夕に事が運ぶはずもない。

捕獲したイノシシを

ありがたくいただくにも

ハードルがある

電気柵の刺激には 徐々に慣れてしまう

被害をめぐる環境調査なども実施する、自然環境のコンサルタント企業である地域環境計画の井上剛氏によると、

「イノシシの推定生息数自体は、ピークを越えたともいわれていますが、被害はあまり減っていません。そのため対策は、これからも長いスパンで考えていかないといけない。ただ、電気柵や臭いで撃退するといった方法は、限定的効果しか見込めないのです」

つまり、最初は驚いて近づかなくなるなどの効果があるものの、時間がたつにつれて慣れてしまうのである。

「やはり高さのあるフェンスでゴルフ場の敷地全体を囲うといった物理的な方法が、最も効果があります。ただし、長い間の使用を考えると、さ

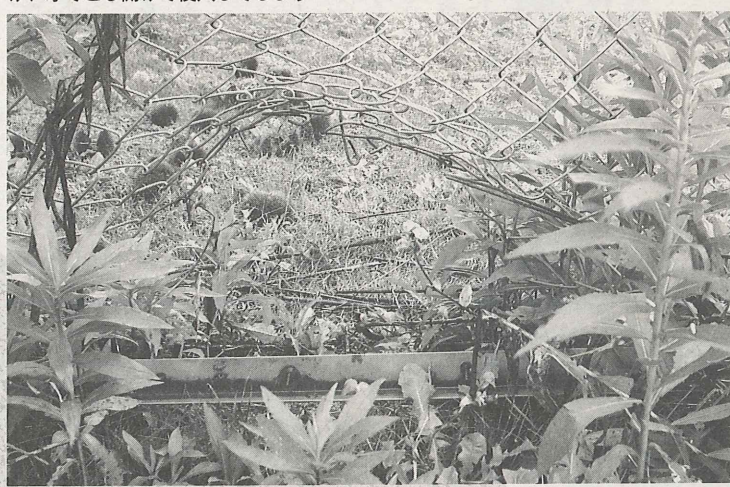
びにくい素材で頑丈なもの。それもそれなりに工事に手間をかけてしっかり設置しないと効果が見込めないでしょう」

そのため、この方法を採用すると、平均して200メートル当たり20万円ほどの費用がかかるという。効果が絶大だとしても、今、経営の苦しいゴルフ場などではなかなか取りかかれまいだろう。

もちろん捕獲を促す動きもある。冒頭、国の補助金の支出額が増加していることに触れたが、多くはイノシシやシカを捕った際の報奨金などに充てられている。報奨金の金額は自治体などによってばらつきはあるが、高くても数万円である。報奨金の増額は、確かに駆除数が増えることに貢献しているのを見る向きもあるが、

「不正受給という問題も各地で起こ

フェンスを張り巡らせていても、ちょっとしたほころびを見つけ、牙でこじ開けて侵入してしまう

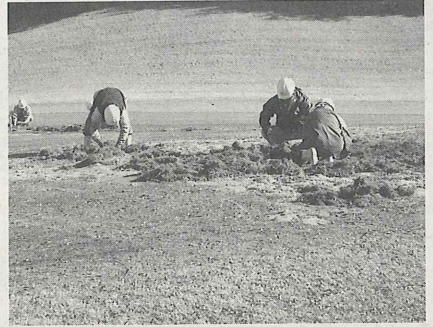


写真・TPC

っている。捕獲したイノシシなどの写真やしっぽを役所に提出するだけで報奨金が支払われていたために、同じイノシシの写真などを提出して、不正に受給していたハンターがいたんです」(近畿地方のハンター)

また、捕獲に関してもゴルフ場ならではの問題もあるという。奈良県の認定鳥獣捕獲事業者である株式会社TJ代表の仲村篤志氏は、「即効性が高いのはやはり銃による捕獲なのですが、ゴルフ場の場合、そもそも発砲してはいけない区域

写真・TPC



イノシシの掘った穴の修理に人が割かれてしまうと、通常のメンテナンスが後手に回る悪循環にも

になつているケースも多いんです。それに一度、銃で捕獲しても、今度は他のイノシシが縄張りにしてしまいます。そうすると、捕獲と物理的な防衛としての柵の設置などが不可欠ですが、景観上の理由から柵などの設置を嫌がられるケースも多い」という。

また、捕獲したイノシシなどは廃棄物として処理されるが、それについては二頭当たり数万円、またハンターを1日雇えば数千円の費用がかかる。経営が苦しいゴルフ場では、定期的にハンターを雇って捕獲を要請するのは、コスト面からも楽ではないだろう。

近年ジビエ（野生動物）料理がブームになり、ゴルフ場で捕獲されたイノシシなども、どんどん食べてし

まえばいい、と思う人も少なくないだろう。

「かつてはゴルフ場のレストランで振る舞うこともあった」（ゴルフ場関係者）というが、現在はそんなに牧歌的に事は進まない。

まず捕獲したイノシシは、許可を受けた施設でしか解体や処理をすることはできない。そうでない場所、つまり捕れた現場などで解体しても販売することはできないのである。

さらに、震災が後を引いている。現在「獣害は北上している傾向がある」（地域環境計画・井上氏）というが、原発事故の影響で、東北や北関東ではイノシシなどの出荷制限が続いているところがある。出荷制限とは、放射性物質の基準を超えた食品の流通を避けるために、地域ごとに出荷の制限を国が指示するものだ。安直に、捕獲して食べればいい、などとはいつていられない状況がある。

夜間の見回りは効果が高い

なんだか万策尽き果てた感もあるゴルフ場の獣害対策だが、実は意外な方法に効果があるという。

「意外なほど人力は効果がありました」

そう語るのは、先述の鹿沼グルー

プ・福島氏だ。

「夜間の巡回をゴルフ場全体で行ったところ、これはやはり効果がありました。やみくもに捕獲するのは違う獣害対策として、今後も続けた方がいい」

この方法は、もちろん夜間の人件費、労働時間の延長などの問題もある。そういう意味では、経営危機からV字回復を果たし、体力のある鹿沼グループだからできた方法かもしれない。しかし、ジビエが思った以上には普及せず、流通もいまだままならない地域がある中で、捕獲以外の方法を考える必要性は高い。

「電磁誘導式カートにサーチライトをつけて、無人でコース内を巡回する」（ゴルフ場関係者）

という方法もある。これであれば、

夜間の人件費もかからず、また興奮したイノシシに襲われるといった危険もない。また、最近では、狼形のロボットなどの開発が進むなど、捕獲一辺倒ではない獣害対策も考えられつつある。いずれにしても、今後、

ゴルフ場にとって獣害対策なしに運営は成り立たないだろう。関係者を取材する中で、TSSJの仲村氏の言葉が印象的だった。

「イノシシたちは、いわば先住民です。餌を求めてやって来るのは仕方ないこと」

豊かな自然環境の一部を借りて楽しむのがゴルフというスポーツなら、そこに生息する動物たちのことを忘れてはいけない。ゴルフ場の獣害は、これからのゴルフの在り方そのものを問いかけているのかもしれない。



周囲と同化して見えにくい
が、ハンターに仕留められた
イノシシの姿

写真・TSJ